

最高から最深への因果

——トマス・アクィナスにおける最高原因の能力と働きへの道——

小山田 圭一

1. 序

1.1 背景

トマス・アクィナスによる神の存在論証には、それとは別種の存在論証（アンセルムスによる論証など）には見られない一つの特徴がある。それは、この世界や世界に属するものごとに対し、それらの原因を問うということによって論証が展開されるという特徴である¹⁾。この特徴は、経験から出発するというかぎりではトマスの存在論証に帰される後驗性という特徴とは区別されなければならない（当然関連は認められるが）。というのも、原因を問うということと経験より先か後かということとは別のことだからである²⁾。以下では、このような原因を問うという特徴を「原因探求性」と呼ぶことにする³⁾。

1) トマス自身もこの特徴を認めるであろうことは、ST I, q. 2, a. 2, c. に「結果を通じて原因の認識へと進む」とあることから窺える（cf. *InBDT*, q. 5, a. 1, ad 9）。なお、著作の略号については慣例に従い、引用は OPTIMAE EDITIONES OPERUM THOMAE DE AQUINO (<http://www.corpusthomaticum.org/reoptedi.html>) に記載の版を用いるものとする。

2) 原因を問うという特徴は、本性上より後なる結果からより先なる原因に向かうという意味ではアポステリオリであるが、経験に後行するという意味でのアポステリオリではない。

3) 原因探求性を主題にした研究は見当たらなかったが、五つの道については多くの文献がある。我々が参照した主なものは次である。Pawl, T., “The Five Ways”, in *The Oxford Handbook of Aquinas*, Davies, B. and Stump, E. (eds.), OUP, 2012, chap. 9; Bochenski, J. M., “The Five Ways”, in *The Rationality of Theism*, Adolfo Garcia dela Sienna (ed.), Rodopi, 2000 (the original in German, 1989), pp. 61–92; Wippel, J. F., *The Metaphysical Thought of Thomas Aquinas*, CUA Press, 2000, part three; Kenny, A., *The Five Ways: St. Thomas Aquinas’ Proofs of God’s Existence*, Routledge, 1969；松本正夫, 「神の存在証明」についての理論的批判的考察, 『存在論の諸問題』所収, 岩波書店, 1967, pp. 89–115.

この原因探求性という特徴について、二つのことに注意されたい。第一に、この特徴はトマスの目指す知恵 (*sapientia*) の解明⁴⁾に資するということである。その理由は以下の通り。トマスにとって知恵とは最高の原因に関する認識に他ならない⁵⁾。それゆえ、探求における第一の目的が神を認識することであるのはよいとして、知恵という観点に立つのであれば、それはむしろ最高の原因としての神の認識であると言うべきである。しかるに、神について包括的な考察を行うトマスの著作において、神を原因として捉えることを最初に可能にするのは、神の存在論証である。というのも、そうした著作の冒頭に置かれた存在論証では、その原因探求性によって、神の存在のみならず、神が何らかの因果系列における第一の原因であることも同時に示されているからである⁶⁾。したがって、知恵の解明に関するかぎり、論証が原因探求性を有していることには相当の意義がある筈である。

第二に、原因探求性という特徴が、人間の本性的欲求に即したものだということである。トマスは、人間の神認識を問う場面 (*ST I, q. 12, a. 1, c.*) で次のように述べている。

人間には、結果を観察するとその原因を認識したくなるという本性的欲求が内在している。そして、驚きが人々において生起するのはこうした欲求からである。

原因を知りたいという欲求が人間にとって本性的なものだとすれば、存在論証が有する原因探求性という特徴は人間にとって望ましいものと言えよう。またここでは、原因認識への欲求に驚きということが結び付けられて語られている。今、第一の注意点で述べた知恵のことを考え合わせれば、トマスの考えが、かのアリストテレス『形而上学』の冒頭 (982a20-983a21)、第一の原因を研究する観照的な学として知恵があり、その知恵を愛好する (哲学する) ことは驚きから始まると言われる箇所

4) *ST I, q. 1, a. 6, c.; q. 2, a. 1, pr.; SCG I, cap. 1; cap. 2; InSent. I, pr., q. 1.*

5) *ST I, q. 1, a. 6, c.; I-II, q. 57, a. 2; q. 66, a. 5; SCG I, cap. 1; II, cap. 4; InSent. I, pr., q. 1, a. 3, qc. 1, c.; etc.*

6) *ST I, q. 2, a. 3; SCG I, cap. 13; InSent. I, d. 3, Divisio Text.; CT I, cap. 3.*

と軌を一にしていることが判る⁷⁾。

1.2 目的と概要

今、神の存在論証として *ST I, q. 2* における五つの道を考えよう。そして、上の二つを踏まえ、五つの道から最高の原因についての理解をできるかぎり得ようとしよう。すると、五つの道には解明したくなるような共通の不明点が見出される。それは、それぞれの道で因果系列を遡及して行き着く、それ以上の原因を持たない第一の原因は、何をどのように原因する (*causare*) のかということである。このことについて五つの論証のみから判断できるのは、高々、それぞれの論証の出発点によって規定される原因性の性格だけである。例えば、第一の道では動かす原因、第二の道では作出因などの性格である。しかし、そうした性格付けだけでは、何をどのように原因するのかについて十分に明らかにしたとは言えない。というのも、例えば「動かす原因」とだけ言っても、どんな可能態をどんな現実態にもたすか、またそれは如何なる仕方では未だ不明であり、より具体的なことは判らないからである。それゆえ、それぞれの道で第一原因が何をどのように原因するかを解明することは、上述の背景を踏まえれば、重要な課題である。本論文の目的は、この課題をトマス自身がどのように遂行したかを明らかにすることである。無論その遂行の結果は、存在論証に後続する議論 (*q. 3* 以降) から抽出されることになるが、その際我々はトマスの議論の論理的構造が可能なかぎり明らかになるよう努めたい。というのも、それによって議論の体系性が浮き彫りになり、トマスが依拠する前提や、各論証の位置付けなどについての議論がしやすくなるからである。そして我々が示すことになる論理的構造は、トマスが本性的欲求に基づく知恵の解明をどのように進めたか、その思索の一つのかたちである。それを明らかにするという意味で、我々の考察は一つの論理的註解となる。そこで以下では、トマスによる原因探求の結果の一部を、存在論証から続く一連の論証として理論的に再構成し、そこから引き出せるいくつかのことを議論したい。

7) *SCG III, cap. 25, n. 2065* ではより明確に原因認識の欲求に関わる驚きが哲学の始まりとされる。Cf. also *SCG III, cap. 50, n. 2277; ST I-II, q. 41, a. 4, ad 5.*

なお、以下での考察は、第一の道に関わる範囲に絞られる。すべてを考察するには紙幅が足りないというのが一つの理由であるが、もう一つには、*ST I*, q. 2, a. 3, c. の冒頭で第一の道が「非常に明白な道 (manifestior via)」と評されていたり、*SCG I*, cap. 13 や *CT I*, cap. 3 では第一の道と同様の論証だけが神の存在論証とされたりもしているように、トマス自身が第一の道を重んじていると思われるからである。また、第一の道から続く一連の論証についても考察の範囲を限定したい。まず、第一原因について論証されることがらの数だけ論証の道筋が考えられるが、その内、事物を産出する能力や働きに関する理論上の帰結に考察の範囲を限定したい。この限定は、紙幅の問題もその理由であるが、第一の道との接合の良さという理由もある。さらに、トマスにおいては、一つの帰結を導くのに推論過程の異なる複数の論証が提示されていることがある (例えば *ST I*, q. 3, a. 1 では三つの論証が提示されている)。これについては、恣意性を免れていないことを認めつつも、それらの内の一つを選んで考察を加えることにしたい。

また以下では、各論証の可否や真偽という問題に深くは立ち入らない。原則、トマスによる論証を推論の構造まで含めて彼の主張として受け入れ、その論理的な道筋を考察する。

2. 第一の道とその到達点

まずは、存在論証の第一の道を再構成した形で示しておこう⁸⁾。第一の道は、動かすものと動かされるものとの因果系列を遡及する論証であり、以下のように進められる⁹⁾。

1) この世界において何らかのものどもは動かされてある¹⁰⁾ [経験的事

8) 第一の道のより形式的な再構成については、Salamucha, J., *Knowledge and Faith*, Rodopi, 2003, pp. 97-135; pp. 311-393 及び Bochenski の前掲論文を参照のこと。

9) 以下の論証では各命題に番号を付け、導出の根拠を [] 内の番号で示す。導出されたものではない命題 (定義や原理など) の後の [] には、命題の簡単な説明が書き入れられている。

10) *ST I*, q. 2, a. 3, c. における各命題との対応は次のようになる (以後同様)。1) «Certum est enim, et sensu constat, aliqua moveri in hoc mundo.»; 2) «Movere enim nihil aliud est quam educere aliquid de potentia in actum.»; 3) «Nihil enim movetur, nisi secundum quod est in potentia ad illud ad quod movetur, movet autem aliquid secundum quod est actu.»; 4) «de potentia autem non potest aliquid reduci in actum, nisi per aliquod ens in actu.»;

実]；2)動かすこととは何かを可能態から現実態へと引き出すことである [定義]；3)何ものも、それへと動かされるところのそれに対して可能態にあるのでなければ、動かされない[2]；4)何かが可能態から現実態へと導かれ得るのは、現実態にある何らかの有によってでなければならぬ [原理 (因果律の一形態と見做せる)]；5)同じものが、同じ点に即して現実態にあると同時に可能態にあることは不可能である [原理 (矛盾律の一形態と見做せる)]；6)同じことに即して、また同じ仕方で、何か動かすものでありかつ動かされるものであること、あるいは自らそのものを動かすものであることは不可能である [3, 4, 5]；7)動かされるものはすべて他のものによって動かされる[6]；8)それによって動かされるところのものが動かされるならば、それ自体も他のものによって動かされ、またその他のものもさらにそれとは別のものによって動かされなければならぬ[7]；9)第二の動かすものどもは、第一の動かすものによって動かされるのでなければ、動かさない [杖と手の例による例証]；10)8)の進行が無限に続くとしたら、どんな第一の動かすものも存在しないことになり、したがって、それ以外のどんな動かすものも存在しないことになってしまう [8, 9]；11)8)の進行が無限に続くことはできない [10, どんな動かすものもなくなってしまうという虚偽]；12)何ものにも動かされることのない、何らかの第一の動かすものに至るのは必然であり、すべての者がこれを神だと知解している [8, 11]。

今、この再構成によって、論証の前提が何かは明らかである。それは定義を除けば、命題 1, 4, 5, 9, 10 である。では、論証の帰結は何か。当然、神が存在することは帰結とされなければならない。しかし、ある

5) «Non autem est possibile ut idem sit simul in actu et potentia secundum idem ... quod enim est calidum in actu, non potest simul esse calidum in potentia ... »; 6) «Impossibile est ergo quod, secundum idem et eodem modo, aliquid sit movens et motum, vel quod moveat seipsum.»; 7) «Omne ergo quod movetur, oportet ab alio moveri.»; 8) «Si ergo id a quo movetur, moveatur, oportet et ipsum ab alio moveri et illud ab alio.»; 9) «moventia secunda non movent nisi per hoc quod sunt mota a primo movente, sicut baculus non movet nisi per hoc quod est motus a manu.»; 10) «sic non esset aliquod primum movens; et per consequens nec aliquod aliud movens.»; 11) «Hic autem non est procedere in infinitum.»; 12) «Ergo necesse est devenire ad aliquod primum movens, quod a nullo movetur, et hoc omnes intelligunt Deum.»

いは意外かもしれないが、帰結されるのはそれだけではない。この論証では神の存在以外にもいくつかのことが帰結されている（少なくともトマスはそう見做している）。ここでは、以下での必要に応じて次の二つを挙げておきたい¹¹⁾。

13) 神は第一の原因 (causa) あるいは根源 (principium) である。

14) 神は第一の有 (ens) である。

命題 13 が帰結とされていることは次のようにして確認できる。例えば、q. 2, a. 2, c. における「原因の存在が論証され得る」という “demonstratio quia” の説明が第一の道に適合するなら、第一の道で示されるのも、無論、原因の存在である。またトマスによれば、根源は原因よりも一般的であるから¹²⁾、第一原因は第一根源でもある。さらに、q. 2, a. 3, ad 2 では第一根源であることが（主文で）既に示されたこととして言われている。次に命題 14 であるが、これはまず、第一の道において、動かすものは現実態にある何らかの有であるとされていることに注意したい（命題 4）。また、*ST* や *SCG* では存在論証で存在が示されたものについて、その直後の議論で何の断りもなく、「第一の有」と呼んでいる¹³⁾。

以上、神の存在論証の帰結と見做せる二つのことを確認した。今、神の存在とともに帰結されるこれら二つを、単なる付随的なものと片付けることはできない。というのも、いずれの規定もその後の理論展開において必要になるからである。しかるに、13 と 14 に隙の無い論証が与えられているかと言え、それは心許ない。したがって、トマスの体系において論理的厳密化などの補正が急務であるのは、実は、これら二つの導出という部分であるかもしれない。しかし、我々の課題は、論証の可否ではなく、飽くまでトマスの理論展開を辿ることであるから、今は問題を提起するに留めて先を急ぐことにしよう。

3. 神の単純性・無限性・唯一性

まずは、神が純粹現実態であること、神において存在と本質が同一で

11) 他にも、「神が第一の動かすものであること」や「神が不可動であること」をトマスは帰結と見做していると考えられるが、それらについての考察は省略する。

12) *ST* I, q. 33, a. 1, ad 1; *InSent.* I, d. 29, q. 1, a. 1, ad 2; *QDPD*, q. 10, a. 1, ad 9; *DPN*, cap. 3.

13) *ST* I, q. 3, a. 1, c.; *SCG* I, cap. 14, n. 116; cap. 16, n. 129.

あること、神には如何なる複合も存しないことを順次示していく。

15) 端的には現実態が可能態に先行する¹⁴⁾ [4] ; 16) 第一の有であるものは現実態においてあり、如何なる仕方でも可能態においてあることはない [15 (最も先行するものが何らかの可能態にあれば、それは15に反する)] ; 17) 神は第一の有である [14] ; 18) 神においては如何なるものも可能態においてあることはできない [16, 17]。

以上のことから、神が純粹現実態であることが判る。さらに進めよう。19) 存在はすべての形相や本性の現実態性である¹⁵⁾ [存在と本性に関する原理的規定、善性や人間性による例証] ; 20) 存在そのものがそれと別のものとしての本質に関わるのは現実態が可能態に関わるそうした仕方である [19] ; 21) 神において可能態的なものは何もない [18] ; 22) 神の本質は神の存在と別のものではない [20, 21]。

これにより神の本質が神の存在そのものであることが示された。

次は、神において如何なる複合も存しないことである。

23) 複合されたすべてのものにおいて、諸部分の内の一つが他の部分との関わりで現実態であるか、あるいはすべての部分が全体との関わりで可能態にあるようにしてあるかのいずれかである¹⁶⁾ [複合に関する原理的規定] ; 24) 複合されたすべてのものにおいて可能態と現実態がなければならぬ [23] ; 25) 神において可能態と現実態があるということはない [18] ; 26) 神は如何なる仕方でも複合されていない [24, 25]。これで神がまったくもって単純であることが示された。そしてこれにより、神に帰されることのすべてについて、神はそれそのものであってそれ以外

14) *ST I*, q. 3, a. 1, c. 15) «simpliciter tamen actus prior est potentia»; 16) «necesse est id quod est primum ens, esse in actu, et nullo modo in potentia.»; 17) «Deus est primum ens.»; 18) «Impossibile est igitur quod in Deo sit aliquid in potentia.»

15) *ST I*, q. 3, a. 4, c. 19) «esse est actualitas omnis formae vel naturae, non enim bonitas vel humanitas significatur in actu, nisi prout significamus eam esse.» (Cf. *QDPD*, q. 7, a. 2, ad 9.); 20) «ipsum esse comparetur ad essentiam quae est aliud ab ipso, sicut actus ad potentiam.»; 21) «Cum igitur in Deo nihil sit potentiale.»; 22) «sequitur quod non sit aliud in eo essentia quam suum esse.»

16) *ST I*, q. 3, a. 7, c. 23) «in omni composito ... vel una partium est actus respectu alterius; vel saltem omnes partes sunt sicut in potentia respectu totius.»; 24) «in omni composito oportet esse potentiam et actum.»; 25) «esse potentiam et actum, quod in Deo non est.»; 26) «Deus nullo modo compositus est.»

との複合を含まないことになる。すなわち、神が A であるとき神は自らの A 性そのものであるということや、神が B するとき神は自らの B することそのものであるということが成り立つ。特に、神が真 (verum) や善 (bonum) であり、存在する (est) ことから、神が自らの真理 (veritas)、自らの善性 (bonitas) であり、自らの存在 (esse) そのものであるということが成り立つ。今、こうしたことのすべてが神の単純性 (非複合性) から直ちに帰結するという事に留意されたい。

次は神が無限であることに向かう。

27) 何かが無限と言われるのは、それが限られていないことによってである¹⁷⁾ [定義] ; 28) 限られるとは、ある仕方では質料が形相によってであり、またある仕方では形相が質料によってである [質料形相論的定理] ; 29) 質料は、自らがそれによって限られるところの形相によって完全になる [質料形相論的定理] ; 30) 質料に帰されるかぎりでの無限は不完全の理拠を持つ [28, 29] ; 31) 形相は質料によって完全になるのではなく、むしろ質料によってその豊かさは縮減される [質料形相論的定理] ; 32) 質料によって限定されない形相の側に認められるかぎりでの無限は完全の理拠を持つ [28, 31] ; 33) すべての内で最大限に形相的であるのは、存在そのものである [19] ; 34) 神の存在は如何なるものにも受け取られず、むしろ神は自存する自らの存在である [22, 26] ; 35) 神そのものは無限であり完全である [32, 33, 34]。

このようにしてトマスは、不完全な方に限定が無いことと完全な方に限定が無いことを対比させつつ、神が完全な方に限定の無いものであることを示している。

さらに、神が唯一つであることに進もう。

17) *ST I, q. 7, a. 2, c. 27)* «infinite dicitur aliquid ex eo quod non est finitum.»; 28) «Finitur autem quodammodo et materia per formam, et forma per materiam.»; 29) «Materia autem perficitur per formam per quam finitur»; 30) «et ideo infinite secundum quod attribuitur materiae, habet rationem imperfecti»; 31) «Forma autem non perficitur per materiam, sed magis per eam eius amplitudo contrahitur»; 32) «unde infinite secundum quod se tenet ex parte formae non determinatae per materiam, habet rationem perfecti.»; 33) «Illud autem quod est maxime formale omnium, est ipsum esse»; 34) «Cum igitur esse divinum non sit esse receptum in aliquo, sed ipse sit suum esse subsistens»; 35) «manifestum est quod ipse Deus sit infinite et perfectus.»

36)ある単一なものがそれによってこの何かであるところのものは、如何なる仕方でも多くのものに共通化され得ない¹⁸⁾[共通と特殊についての原理的規定、ソクラテスと人間による例証]；37)もし、ある単一なものが、それによって何かであるところのものと同じものによってこの何かであるならば、ちょうどその単一なものが複数あることはできないのと同様、その何かが複数あることもできない[36]；38)神は如何なる仕方でも複合されていない[26]；39)神は、同一のものに即して、神であり、またこの神である[38]；40)神が複数あることは不可能である[37, 39]。

この論証がわかりにくければ、次のように考えればよい。一般に A が唯一つであることを示すには、ある x と y が A である場合には必ず x と y が同一であるということが示されなければならない。上の論証によってそれが神について示されたことになるのを確認しよう。今、ある x と y が神であるとする。神である以上、x も y も全く複合を含まないから、x も y も神の本性そのものである[38]。しかるに、もし x と y が異なるものだとすると、神の本性以外に共通化され得ない何かを持っているなければならない[36]。ところが、x も y も複合を含まないのであるから、神の本性以外に共通化され得ない何かを持つことはできない。それゆえ、x と y は同一でなければならない。トマスの念頭には、おそらくこのような理解があった筈である。上の論証では、命題 37 を介することで議論がわかりにくくなってしまうと思われる。しかし、37 を導入することには利点も見出せる。それは、神の個性性がどのようにして成り立つのかをより明示的にできるという利点である。

ここまで、第一の道から続けて、神が可能態を含まないこと、存在以外に本質を持たないこと、複合されていないこと、限られていないこと、複数存在しないことに至る否定の論証を辿ってきた。続けて、神の能力と働きについての諸論証に進むことにしよう。

18) *ST I*, q. 11, a. 3, c. 36) «illud unde aliquod singulare est hoc aliquid, nullo modo est multis communicabile. Illud enim unde Socrates est homo, multis communicari potest, sed id unde est hic homo, non potest communicari nisi uni tantum.»; 37) «Si ergo Socrates per id esset homo, per quod est hic homo, sicut non possunt esse plures Socrates, ita non possent esse plures homines.»; 38) «nam ipse Deus est sua natura»; 39) «Secundum igitur idem est Deus, et hic Deus.»; 40) «Impossibile est igitur esse plures deos.»

4. 神の能力と働き

ここでは、事物を存在へと産出する神の能力と働きとについて論証を再構成して行こう。まずは、神に能動的能力があることである。

41) 各々のものは、現実態においてあり完全であるかぎり、何かへの能動の根源である¹⁹⁾ [原理]；42) 神は純粹現実態であり、端的かつ普遍的に完全である [18²⁰⁾]；43) 能動の根源であることは神に最大限に適合する [41, 42]；44) 能動的能力とは他のものへと働きかけることの根源である [定義]；45) 神には能動的能力が最大限にある [43, 44]。

今、神において能動的能力があることだけを示そうとするなら、上の論証は必要無い。というのも、既に第一の道で、何か¹が動かされるのは他のものによってであり、神は動かし動かされる系列の根源であることが示されているため [7, 13]、神が他へと働きかけることの根源であるのは明らかだからである²¹⁾。しかし実は、上の論証ではそれ以上のことが示されている。それは、能動的能力は神において最大限にあるということである。トマスは、この最大限ということを示すために上の論証を採用したのではないだろうか。そしてなぜ最大限を言う必要があるかと言えば、能動的能力が完全性の一つだという認識がトマスにあり²²⁾、そうした完全性が神に最大限に適合することを示したかったからだと思われる。

次は、神の能力が無限であることである。

46) 能動的能力が神において見出されるのは、神が現実態にあるかぎりである²³⁾ [41-45]；47) 受け取る如何なるものによっても制限されない

19) *ST I*, q. 25, a. 1, c. 41) «unumquodque, secundum quod est actu et perfectum, secundum hoc est principium activum alicuius»; 42) «Deus est purus actus, et simpliciter et universaliter perfectus»; 43) «Si ergo Socrates per id esset homo, per quod est hic homo, sicut non possunt esse plures Socrates, ita non possent esse plures homines.»; 44) «potentia activa est principium agendi in aliud»; 45) «Relinquitur ergo quod in Deo maxime sit potentia activa.»

20) 神が最大限に完全であることは、純粹現実態であることから、ほとんど単なる言い換えであるかのように直ちに導かれることがらである (Cf. *ST I*, q. 4, a. 1, c.)。

21) この別証明については *SCG II*, cap. 6, n. 880 及び cap. 7, n. 887 が典拠になり得る。

22) *SCG II*, cap. 8, n. 895; cap. 7, n. 889; *ST I*, q. 42, a. 6, c.; q. 25, a. 1, ad 3; *QDPD*, q. 1, a. 1, c.; ad 2.

かぎりにおいて、神の存在は無限である[27-35]；48)それによって神が働くところの神の本質そのものは無限である[46, 47, 22, 26]；49)ある能動者がそれによって働くところの形相をより完全な仕方ですれば、働くことにおけるその能力もその分だけより大きい[形相と能力についての原理、熱と熱する能力による例証]；50)神の能動的能力は無限である[48, 49]。

続いては神が全能であることであるが、以下の論証は、*ST I*, q. 25, a. 3, c. での論理的に曖昧な点を *SCG* や *QDPD* の記述に基づいて補ったものとなっているので注意されたい²⁴⁾。

51) 各々の能動者は自らに似たものを働きの結果とする²⁵⁾[原理]；52) 各々の能動的能力に固有な対象としての可能なものが対応するのは、能動的能力がそれにおいて基礎付けられるところの現実態の理拠に即してである[51]；53) 神の能力がそれに基礎付けられているところの神の存在は、無限の存在である[19, 46, 47]；54) 有の理拠を持ち得るものの一切が、神の能動的能力の対象である[52, 53]；55) 非有のみが有の理拠に対立する[論理的命題]；56) 自らにおいて存在と非存在とを同時に含意するもののみが可能なものの理拠を持ち得ない(i. e. 有の理拠を持ち得ない)[55, 矛盾律]；57) 自らにおいて存在と非存在とを同時に含

23) *ST I*, q. 25, a. 2, c. 46) «secundum hoc potentia activa invenitur in Deo, secundum quod ipse actu est.» 47) «Esse autem eius est infinitum, in quantum non est limitatum per aliquid recipiens»; 48) «cum ipsa essetia divina, per quam Deus agit, sit infinita»; 49) «In omnibus enim agentibus hoc invenitur, quod quanto aliquod agens perfectius habet formam qua agit, tanto est maior eius potentia in agendo.»; 50) «Unde necesse est quod activa potentia Dei sit infinita.»

24) Cf. *SCG II*, cap. 22, n. 983; *QDPD*, q.1, a.3, c.; a. 6, c.; a. 7, c. トマスにおける神の全能について詳しくは、小山田圭一、「[全能 omnipotentia]は何を表示するのか」、『筑波哲学』第23号, pp.106-139, 2015を参照のこと。

25) *ST I*, q. 25, a. 3, c. 51) «cum unumquodque agens agat sibi simile»; 52) «unicuique potentiae activae correspondet possibile ut obiectum proprium, secundum rationem illius actus in quo fundatur potentia activa»; 53) «Esse autem divinum, super quod ratio divinae potentiae fundatur, est esse infinitum»; 54) «Unde quidquid potest habere rationem entis, continetur sub possibilibus absolutis, respectu quorum Deus dicitur omnipotens.»; 55) «Nihil autem opponitur rationi entis, nisi non ens.»; 56) «Hoc ... quod implicat in se esse et non esse simul ... non potest habere rationem factibilis neque possibilis.»; 57) «Hoc igitur repugnat rationi possibilis absoluti, quod subditur divinae omnipotentiae, quod implicat in se esse et non esse simul.»; 58) «Quaecumque igitur contradictionem non implicant, sub illis possibilibus continentur, respectu quorum dicitur Deus omnipotens.»

意するもののみが神の能動的能力の対象から外れる [54, 56] ; 58) 矛盾を含意しないものすべてが、神の能動的能力の対象である [57]。

以上によって、神の存在論証では明らかではなかった、第一の根源がどのような根源であるかが明らかになった。しかもそれは第一の道に続く諸論証によってである。すなわち、第一の道で示された第一の根源とは最大限に能動的能力であり、無限であり、矛盾を含意しないすべてのものへと及ぶ全能であったという帰結へと我々は導かれたのである。

さて、神の能力がすべての有に及び得ることは以上から明らかであるが、その原因性が実際にすべての有に及んでいるか否かは、以上の議論によっても未だ判然としない²⁶⁾。そこで、一部の有だけでなく一切の有の存在が神によって原因されたものであることを論証しようとするのが、*ST I, q. 44, a. 1, c.* であり²⁷⁾、それは次のように進められる。

59) 何かがあるものの中で分有によるものとして見出されるなら、あるものの中でその何かは本質的な仕方で当の何かが適合するところのものから原因されなければならない²⁸⁾ [分有と因果の原理、鉄と火による例証] ; 60) 神は自体的に自存する存在そのものである [34] ; 61) 自存する存在は唯一つでしかあり得ない [36-40] ; 62) 神以外のすべては自らの存在ではなく存在を分有するものである [60, 61] ; 63) 神以外のすべては如何なる仕方で存在するものであっても神から原因されたものでなければならない [59, 62]。

今、この論証によって示されたのは、事物を存在へと産出する働きがすべてに及んでいるということであって、その働きが神に固有だということではない。というのも、実際にはすべてが神に原因されていながら、

26) 原因性がある有に及んでいることは第一の道から示せる。実際 *SCG II, cap. 6, n. 880* では、第一の道と同等のことに基づいて神がある有にとって存在の原因であるとしている。

27) *ST I, q. 44, a. 1, c.* が神の存在論証だとされることもあるが (稲垣良典, 『経験主義と経験』, 知泉書館, 2008, p. 30), 誤解である。*q. 44, a. 1, c.* は神の単純性や唯一性を前提とするからである。

28) *ST I, q. 44, a. 1, c. 59)* «Si enim aliquid invenitur in aliquo per participationem, necesse est quod causetur in ipso ab eo cui essentialiter convenit; sicut ferrum fit ignitum ab igne.»; 60) «Deus est ipsum esse per se subsistens.»; 61) «esse subsistens non potest esse nisi unum.»; 62) «Relinquitur ergo quod omnia alia a Deo non sint suum esse, sed participant esse.»; 63) «necesse est dicere omne quod quocumque modo est, a Deo esse.»

神以外の何かも存在を原因することができるかもしれないが、上の論証はそうしたことの排除にまで立ち入らないからである。働きの固有性を言うためには別の議論が必要となる (ST I, q. 45, a. 5)。そうした議論は、以上の諸論証に続けてさらなる理論展開をもたらす筈であるが、それについては他日を期する他ない。

以上、第一の道に続けて、事物を存在にまで産出する神の働きの一端に至るまでの諸論証を見てきた。そこでは、神についての諸々がどんな前提からどのように導かれているかが明示的になるようにした。そして今、このように論証の論理的構造をはっきりさせることで、直ちに見出せるいくつかのことがらがある。節を改め、それらを確認しよう。

5. 論証の論理的再構成から引き出せる二つのこと

まず指摘できるのは、以上のような再構成が各論証の前提をより明確にすることによって、トマスの議論が理性的な論証なのか信仰によって初めて認められるものなのかという問題をより考え易くできるということである。例えば、Wippel は神の全能が理性的に論証可能であるか否かを主題として論じ、全能に関するトマスの議論が理性的なものであると結論付ける²⁹⁾。何らかの論証が信仰に依拠していないことを示すためには、論証の論理的構造や前提の分析が必要な筈だが、彼の議論はトマスの論証の概要に基づくのみであるため、それを行えておらず、優れた洞察を含んではいるものの、根拠の実証性に乏しくなっている。しかし、第一の道から全能の論証までの上述の道程を、命題間の依拠に注意しつつ遡れば、少なくともトマスの議論に内在するかぎりでは、問題の論証可能性をより実証的に議論できるようになるのは明らかである。無論、上述の考察によってトマスの論証と信仰との関係が直ちに明らかになるなどとは毛頭言えないが、こうした理性と信仰に関わる問題に対しても、我々の考察や手法が有益な材料を提供できるとは言えるだろう。

次に、「分有」や「自存するしかじかそのもの」などのプラトン主義的な観念とトマスによる論証との関わりについて考察しておきたい。こ

29) Cf. Wippel, J., "Thomas Aquinas on Demonstrating God's Omnipotence", *Revue Internationale de Philosophie*, 52, n. 2, 1998, pp. 227-247 (reprinted in his *Metaphysical Themes in Thomas Aquinas II*, CUA Press, 2007).

れを考察する意義は、トマスの体系が、アリストテレスから多くを得ているにも関わらず、プラトン主義的要素を取り入れたことで不整合に陥っていないかという問題³⁰⁾などを考慮した場合、小さくない筈である。前節までの結果によれば、論証の前提においてプラトン主義的要素が明示的に出現するのは、最後の、すべてが神に原因されて存在しているということの論証のみである（命題 59 が分有に関わる）。裏を返せば、それ以外の論証（命題 58 までの論証）では、プラトン主義的要素に依拠せずに（つまり、そうしたものを前提とせずに）推論が進行している。このことについて興味深いと思われるのは、自存する存在そのものである神がそれ以外のものを原因し得る能力を持っていること（命題 58 までの論証で得られる帰結）が、少なくとも明示的にはプラトン主義的要素によらずに論証されているということである。もちろん、第一の道によって初めから他者の根源としての神が導かれていることは事実であるが、あたかも“存在のアイデア”のような自存する存在そのものであることが初めから前提されている訳ではないし、そのような自存する存在そのものに他の存在を原因する能力があることが前提されているのでもない。つまり、命題 58 までの論証において隠れた前提などが無いとしたら、そこでは、必ずしもプラトン主義的でない諸前提から、プラトン主義的であるかに見える帰結が導出されたことになるのである。一方、命題 59 から 63 までの論証には分有への言及がある以上、何らかの意味でプラトン主義的であることを免れない。したがって、整合性を問う観点から見れば、分有に関わる前提である命題 59 について、それがトマスの導入したアリストテレス的枠組みと整合的か否かを検討しなければならない。そしてその検討には、トマスにおける分有についてさらなる研究が必要にもなるだろう。しかし、新たな考察のための余地はここには既に無く、そうした課題はひとまず措かざるを得ない。

6. 結

最後に、表題の「最高から最深への因果」ということに持たせた含意

30) この問題については、上枝美典、「トマスの神はエッセのアイデアか」、『中世思想研究』第 55 号、2013、pp. 96-106 及びそこで参照されている諸文献を参照のこと。

に触れておきたい。「最高」と言われるのは、それ以上の原因が無いからとも考えられるが、もう一つには、より高い原因はより多くのものに及ぶため、すべての有に及ぶ原因は最高の原因であるからでもある³¹⁾。またトマスによれば、「存在はいかなるものにとっても最奥にあり、すべてにまさって深くに内在する (ST I, q. 8, a. 1, c.)」ため、そのような存在を結果とする因果は、存在する事物の“隅々”にまで及ぶという意味で、「最深への因果」だと言えることになる。結局、神から被造物の存在への因果とは、存在の原因であるかぎりで最高の原因から、存在が結果であるかぎりで最深の結果にまで及ぶ因果なのである。そしてこのような一見大袈裟とも思える記述をトマスにおいて可能にしているのは、彼自身がそこに驚異をおぼえていたからだと思われる。次の箇所 (*InSent.* IV, d. 46, q. 2, a. 1, qc. 3, c.) はそのことを伝える顕著な例である。

創造という業において、特に諸事物が存在にまで産出されたということが驚異となるのであり、そうした業において神の全能が最も大なる仕方で明証される。

上で示された一連の論証は、トマスが驚きを抱いた存在への産出ということの一端に至るものであり、最高から最深への因果に対する探求の一つの要だと言える。以上での試みは、そうしたトマスの探求がどんな形をとっていたかをより明確にしようとしたものである。

31) SCG II, cap. 16, n. 935; *InMetaphys.* VI, lec. 3, n. 1205; ST I, q. 44, a. 1, c.